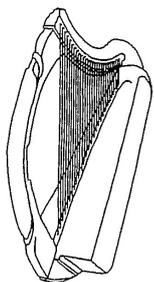


錦秋の午後：第11回チャリティーコンサートは大盛況



金属弦ハープ



吟遊詩人ハープ

小春日和の去る11月17日(土)の昼下がり、今年の悼尾を飾る第11回チャリティーコンサートが、旧朝香宮邸の迎賓館・現東京都庭園美術館大ホールで開催されました。

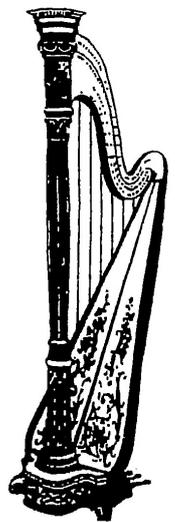
今年は日本・アイルランド外交関係樹立50周年に当たり、ハープの国、アイルランド大使館から後援をいただいて同大使館の方々をはじめ、イタリア大使館の方など外国のお客様や遠く伊豆方面、長野県白馬からもお出掛けくださった方などで満員の会場は賑わいました。

今回は、ケルト文化の薫りを伝えるハープコンサートの企画として、日本では数少ないケルトハープの研究者であり演奏家として大学や各地で関連の講演と演奏活動をしておられる菊地恵子氏と、現在フランスのポントワーズ音楽学校、ルーヴシエンヌ音楽学校で講師をされている砂織氏母娘のソロとデュエットでした。

ステージ上には、金属弦ハープ、吟遊詩人ハープ、アイルリッシュハープ、グランドハープと多様な形態のハープが並びました。ハープの古典、アイルランド民謡、スコットランド民謡、フランス民謡、ロシア民謡、ウェールズ民謡などなどステージ上のハープを使い分けての多彩な演奏。繊細な音の響きとお話に聴衆は素朴で心地よい世界に引き込まれてしまいました。



アイルリッシュハープ



グランドハープ



聴衆の皆さまからは、

「このような内容豊かなハープのコンサートは初めてです。堪能致しました。」

「懐かしさと親しみ、そして安らぎを感じる菊地様母娘の演奏に感銘を受けました。」

「数々のハープとそれにまつわる解説、中世の作曲家の人柄など、大変興味深く伺えたので、このコンサートに参加できて本当に幸せでした。」

「美しい秋の庭園を散策したり、美術館では宝石展を鑑賞、そしてハープの優しい音の世界に浸ることができ、今日は最高！心が豊かになりました！」

「また来年のコンサートを今から楽しみにしています。ユニフェム東京の活動をこれからも応援していきます。」等々の声を頂きました。

ユニフェムの趣旨に賛同して、この企画に初めから加わって下さっていた菊池氏の熱意、また砂織氏は大切な時間を割いて一時帰国されてのご出演、お二人に心から感謝申し上げます。また、会場ではユニフェム募金に多数の方がご協力くださいました。厚く御礼申し上げます。

3回シリーズの「お話の会」

支援活動の現場からのホットな報告を聞く

第4回

『難民の心が求めるもの』

講師：松永 知恵子氏

NPO法人《ACC危機の子どもたち・希望》代表

9月13日、ユーゴ紛争、コソボ紛争によって難民となった子どもたちの救済支援活動に携わる「特定非営利活動法人ACC(Actions for Children in Crisis)危機の子どもたち・希望」の代表、松永知恵子氏から、パワーポイントを使いながら現地の状況をうかがい、新たな認識と視野を開き、少なからず理解を深めることができた。



“紛争や貧困などの社会的困難の中にいる子どもたちとその家族に、心理的支援を提供して平和な世界の実現に貢献する”ことを目的に2001年からセルビア系コソボ難民への活動を開始、その後スリランカ、カンボジアなどでも子どもたちへの教育支援活動を進めている中、現在は日本の子どもたちとのワークショップを通じて交流も始まっている。旧ユーゴスラビアは歴史的にオーストリア=ハンガリー帝国とオスマントルコの両大国が支配する地域であったが、幾つかの経緯を経て1945年、セルビア、クロアチア、スロベニア、ボスニア・ヘルツェゴビナ、モンテネグロ、マケドニアの6共和国で構成される社会主義連邦国家として成した。1991年にスロベニア、クロアチア、更には92年のボスニア連邦からの独立をめぐり内戦に突入し、ユーゴスラビア連邦は解体された。その後コソボ自治州もセルビア共和国からの独立を求めて99年からコソボ紛争が起こり、悲惨な混乱が続いた。

5つの民族、4つの宗教(セルビア正教、マケドニア正教、キリスト教カトリック、イスラム教)、3つの言語(スロベニア語、セルボ・クロアチア語、マケドニア語)がモザイク状に混在するユーゴスラビアの中でも、セルビア共和国コソボ自治州はセルビア人の聖地として栄えた場所でもあった。しかしコソボ自治州に住むセルビア人とアルバニア人の自治権争いを境に民族対立が激化し、それまで融和して生活出来ていた人々が突然に憎しみ合い、むごたらしい殺戮を繰り返すという大規模な武力衝突に発展してしまった。アルバニア系住民が圧倒的に多い自治州内に点在して住む少数のセルビア系住民は、エンクレーブと呼ばれるセルビア人地区から出られず、外部との接触もままならない陸の孤島のような生活を強いられることになってしまった。

激しい紛争の後遺症や未だに家族に行方不明者がいるという辛い状況に加えて、コソボは旧ユーゴスラビアの南北問題といわれる格差、貧困問題を抱えている。特に成長期の子どもたちは日常的に恐怖感と不安感に苛まれ、将来への希望が見えないで苦悩している実態がある。今貧困や経済苦から脱しようと、セルビア共和国では40万人とも言われる若い世代の海外流出が増加している。因みにセルビアの平均月収は約88ユーロ(13,816円)、大学教授は300ユーロである。

社会的にも忘れられてしまいそうな寂しい難民生活の中で、スラボイカさんという80歳位のおばあさんが中心となっている「おばあさんの手」というグループがある。伝統的な刺繍や編み物の技術を活かしながら、手作りの手袋や襟巻きを孤児院の子どもたちにプレゼントして彼らを励ますことによって、自分たちが“誰かの役に立っている”という実感が味わえるし、それが生きる希望になっているのだそうだ。

旧ユーゴ紛争で難民としてコソボに逃れ、そしてコソボ紛争でそこにも住めなくなり居場所がなくなった二重難民と呼ばれる人、家族がバラバラになっている国内避難民、心に深い傷を負ってしまった子どもたちなどの心理的サポートを中心に“私たちは忘れられていない。また会いにに来てくれる”という人間的信頼の回復や明日への希望の光を取り戻せるような息の長い援助活動がどうしても必要だと痛感している。難民には様々な状況があるが『難民の心が求めるもの』は、①物資援助だけではなく、②人間の尊厳、③対等な関係性、④継続、であると言える。戦争や紛争で傷つき混乱した心の回復のためには、“にわか雨のような支援”ではなく、また“軸足を移し変えていくような援助”ではなく、そこにいる人々との強い信頼関係を生むための援助が大切だと考えている。「私たち一人一人が何のために生き、人間らしく生きるの意味や幸福とは何かを問いかけながら、苦悩する人々と地道に、継続的に接触していくならば必ず前進がある」との松永氏の一言が胸に沁み、熱く残った。



「おばあさんの手」編み物

第5回

『私が見たフィリピン』

3回シリーズの「お話の会」

講師：山崎 憲子氏

サントールの会代表／前フィリピン大使夫人



2006年2月に、大学時代の同級生がマニラ郊外で聖心会が始めた貧しい子どもたちのための幼稚園の視察とレイテ島にある

ストリートチルドレンを収容している施設の「子どもの家」の支援、マニラのマザーテレサがやっておられる「老人の家」を視察して支援するということがあった。私もそのような活動を共にして私たちの力で何かフィリピンに役立つことが出来ないかと3人で立ち上げたのが「サントールの会」であった。

フィリピンで感銘を受けたことの一つに女性の地位が高く、第一線に近い形で女性の社会進出が非常に多いことだった。アロヨ大統領やアキノ大統領初め、全国で24人の上院議員のうち4人が女性であり閣僚や次官にも女性がいる。社会福祉省はNGOの窓口、災害時の義援物資の窓口、難民等を扱う省であるが全体の90%が女性である。大使や若い次官のカウンターパートも女性が珍しくないのだ。

フィリピンでは今でも安い賃金でメイドや運転手、コックなどを雇うことが出来るので、ある程度の力があり、家庭を持った後に社会に出て仕事をしようとするなら、簡単に3人、4人のお手伝いさんを雇うことが出来る。その意味で、もともと富のある人や力のある人にとってフィリピンは、大変住みやすい国である。地方に行くとバナナやマンゴーのプランテーションがあるが土地開発・改革をするといっても結局、未だに昔のままの形が残っているために、逆に恵まれない側、雇われる側からすれば大変苦しい生活をしなければならない国だとも言える。

“フィリピンホスピタリティー”という言葉聞いた事があると思うが、フィリピン人は本当にもてなし上手、人を喜ばせ上手である。皆余裕もあり手もあるので楽しくお昼に呼ばれてお茶にも呼ばれ、さらにディナーに呼ばれるというようなこともあったが、それだけではフィリピンを見たことにはならないと、敢えて恵まれない人々の生活の中に足を踏み入れた。

ゴミを捨てた場所が山ようになってメタンガスの発生で高温になり発火、いつもいつも煙が出ているので“スモークマウンテン”と呼ばれたゴミの山。プレスも随分、報道したので世界的に有名になったけれど、スモークマウンテンを緑化しよう、緑の山にしようという運動になり、ある年からゴミを捨てるのを止め、現在は草が生えた緑の小高い丘になっている。周囲には生活を良くするために立てられた住宅や職業訓練所のきれいな建物が建てられたが

道一本隔てた反対側には使わなくなった古い工場跡などに不法に住んでいる人がいる。今も整理された場所とごみごみしている場所とが、緑のスモークマウンテンの周りに混在しているという状態がある。

マニラの郊外、ケソン市のパヤタスに新たに第二のゴミの山が出来ているので解決ではなく動かただけなのだ。毎日トラックがゴミを捨てて山状になっていく周辺に不法で、或は法律に則って住んで、ゴミを現金に換えて生活している家族が一万人以上いる。

4分区に別れているが、日本からは1分区に3つのNGO（ソルト、アイキャン、KNK）がそれぞれの分野が重複しないように入っている。給食＝栄養失調度の高いほうから1日20人に与える、医療、歯科検診、奨学金、学童保育と母親の自立支援などを行っている。

ゴミを引き受けることで行政からお金を貰って潤っているゴミの山の地主がいる。その周辺の住人にも貧富の差があり、ゴミの山に入るには許可証を買って、一日数時間しか入れない。

現金収入を得るために田舎から出てきた5人家族、家賃を払って二階に間借りしている家族、入り口近くに水がきているので洗濯をして生計を立てている家族＝この家族はやっと貯めたて買ったテレビが唯一の娯楽で、祖母と孫が一日中テレビを見て暮らしている。家を見せてもらったお礼は、案内人がやっているのを見て、お米を2キロ（3～4人分＝200円位）あげた。

初めに訪ねた2軒には電気が無い。電気を契約している人から借りる選択もあるが「盗電」と言っただけで勝手に電気を盗み、点けている人が多いそうだ。水はバケツで汲み一日分をタンクに入れて使い燃料はゴミの山から。車が入れる道周辺の店には一日分として買えるように砂糖や小麦粉などは小袋で売っている。道沿いにはNGOの事務所や診療所、デイケアセンターなどもある。



ミンダナオ島の山岳民族の手織りの手提げ

小学校で読み書きや生活習慣によって分けられるのは問題。聖心会のシスターが私立の幼稚園に行けない、月謝を払えない子ども生活習慣や読み書きを身につけられるように幼稚園を創り並行して母親教育、経済的自立のための支援を始めている。

今は卒園生が小学校に通っている。母親たちも何人かが集まってマッサージ技術や縫製を身につけていく機運は生まれている。生活の程度を高めるような活動は大切だと思った。

第6回 『ルワンダの今』

3回シリーズの「お話の会」



講師：ルダシングワ・真美氏
ガテラ・ルダシングワ氏（夫君）
ムリンディ／ジャパン・ワンラブ・プロジェクト
日本事務所 所長

今年春、大学婦人協会の鈴川様を通じてユニフェム東京のオリジナルTシャツを贈呈したことがきっかけとなり、ルワンダ共和国で1997年から障害者支援活動をされ、今では隣国のブルンジ共和国にも活動の範囲を拡大されているルダシングワご夫妻から10月25日、津田塾大学同窓会会議室でお話を伺うことができた。

ルワンダは、内戦があったので余り良い印象は持たれていないが、ルワンダの良いところも伝えられると良いと思う。1994年に大虐殺があり、多くの人が手足に障害を負ってしまった。それ以外にもポリオや先天性の障害、事故、医療ミスによる障害者が沢山いる。

私たちは彼らに、義足や杖、車椅子を製作して提供したり、障害のために仕事に就けない人を雇って一緒に働いている。成人してから手足を切り取られたり地雷で失った人々は、精神的にコンプレックスがあるので、彼らの精神的自立のためにも、障害者スポーツを通して前向きになるように試みている。

ルワンダはタンザニア、ウガンダ、ブルンジ、コンゴに囲まれ、四国の4.1倍位の内陸の小さな国で人口は830万人、ブルンジと並んでアフリカでは人口密度が非常に高い。言語は、国の言葉であるキニャルワンダ語とフランス語を話している。元々ルワンダは王様がいた国で、一言語、同一文化を分かち合っていた国民は大半が農業、牛の飼育と焼き物を仕事にしていたが、植民地化されたときに国民が分けられてしまった。

日本では、ルワンダの虐殺のことは1994年に大きく報道されたが、実際は独立する少し前の1959年から始まりツチ族、フツ族は身分証明書をもとに根拠も無く、例えば背が高いからツチ族、鼻が低いからフツ族などと肉体的特長を理由にされ、分けられ、国民に「自分たちとは違う民族がいる」ということを教え込まれた。今振り返ってみると、人間が生きていく上で一番大切なことは「教育」だと思った。植民地にした人たちは、学校は作ってくれたが正しい教育をしてくれなかった。そのため多くの血が流れてしまった。59年を境にツチ族の女性がレイプされたり、家を焼かれたりしてルワンダから逃れたことがあった。ベルギーの軍人が家を燃やしたり武器を配って後押ししていたのだ。

ルワンダでは定期的に国勢調査が行われ、統計的にツチ族が増加すると虐殺が繰り返してきてきた。その最後が1994年の4月から7月に起こった大虐殺で、100万人以上が殺されてしまった。

1991年に日本に来て、一人の女性（真美氏）に会い、義足製作の勉強をした。ルワンダには肢体の不自由な人が沢山いるので日本から中古の義足を頂き、その人々のために役立つことをしたいと思ったことが活動の一步になった“ムリンディ”という村の名を会の名前にした。94年に反政府軍が勝利し、13年たった今、政府は未来に希望を持ち大人も含み子供たちの教育を掲げている。ベルギー政府は自分たちも虐殺に関わったとして謝罪した。今、民族間の問題は、少しずつよくなっていると思う。

ルワンダは「千の丘」という別名を持っている3000メートル級の山もある緑豊かで温暖な国である。マウンテンゴリラが700頭位いて、ゴリラを観るのが観光のポイントになっているし、外貨収入（1億ドル）を担っている。われわれが観に行くのには500ドル掛かるけれど、観る価値はあると思う。環境問題にも取り組んでいて、ビニールなどは持ち込み禁止になっていて、空港を出る時に取り上げられる。

ルワンダは女性の地位が高く、女性が組織して行動している。女性が前面に出て、色々なことをやっている。男が死んでしまい、残されたのは女性と子供。だから女性が立ち上がらない限り、国としては成り立っていかない。問題のあった国は女性が強くなければ国は立ち上がれないのだ。だからこそ今、女性が立ち上がらないといけない時だと思っている。



ワンラブプロジェクトの
Tシャツ



バナナの皮で貼り絵した
カード

ユニフェム東京から頂いたTシャツは、名古屋港からコンテナで発送され、タンザニアのダルエスサラームから陸路を1ヶ月かかって運ばれた。いまブルンジの倉庫にあるが、ブルンジの障害者や難民キャンプの子供たちに配りたいと考えている。少し先になるが報告させていただく。



絹織物の村を訪ねて

ユニフェム日本国内委員会15周年記念
スタディーツアー参加

ユニフェム東京：池田 落子

10月30日、福岡、関空、成田それぞれから出発した一行24名はバンコクで合流し、先ず、ラオスに行きました。

雨が降らなければ赤土ぼこり、降れば泥んこでタイヤを取られかねないガタガタ道を、首都ビエンチャンから北へ70キロ余り、ユニフェム日本の支援先のサンソン郡パクティア村を訪問しました。

ラオスは一村一寺院といわれる仏教国で、ここにも穏やかな表情の金の仏様が祭られ、その坐像の前で会った村民の表情も明るく、道で出会った子共たちもゴム草履を履き雨の中を傘もささずに歩いているのに、瞳は輝き、興味深々の様子で私たちを見つめ、合掌の挨拶をしてくれました。

民家の壁は板を薄く削った経木のようなものを沢山打ち付けただけなので、窓が少なく、長い雨季のためか、メコン河近くでは高床の家が多く見受けられました。また屋根から雨水を樋を使ってタライや桶に受けていました。

村では、自分の土地に桑を植え、助成金をもらい、蚕を飼って繭を取り、糸を紡いで布を織る。すべてが手作業です。その布には先祖から受け継いできた模様が織り込まれて、中には美事な緋もありました。私は、緋は日本独自のものと思っていましたので、久留米緋や博多織の原点を見た思いでした。

また繭は、白と黄色のものがありました。

「黄色の繭を作るのはどの蚕か」の問いに村の女性たちは「出来てみないとわからない」とあっさり答えてくれました。

雨の中、外灯もない道を帰るため、早めに戻って来ました。この途中で狭い道路から半分、溝に落ちた車に出会いましたが、そこには、通りかかった若者たちが数台のバイクを止めて救出作業をしていました。今の日本ではあまり見る事の出来ない、ラオスの人々の優しさに触れた思いでした。

翌日のラオス手工芸フェスティバルの開会式でパクティア村が優秀賞を取り、前日、村で説明をしてくれた女性が表彰式のトップに登場したことも驚きと共に嬉しいことでした。

この他カンボジアの支援先である「エイズと共に生きる女性連絡会」のプロジェクト等を視察。タイでは国連ビル内にあるユニフェムのバンコク事務所を訪ねて東南アジアユニフェム事務局長にお会いしました。週末にはアンコールワット、アンコールトムなどの史跡見学をして、11月7日に無事に帰国しました。

途上国支援と女性の力を知る旅になりました。これらの地域に旅行された方も多いと思いますが、次回のユニフェムスタディーツアーには是非、多くの方が参加されるよう願っています。詳細な報告については、1月末開催のユニフェム東京総会での佐々木団長の講演をお聞きください。



各地のバザーに参加

- ★ 9月9日 日本パシイワ・バザー（日本汎太平洋東南アジア婦人協会）
- ★ 10月27日 ユニフェム富山参加「活動屋台村」＝富山総合福祉会館
- ★ 10月27, 28日 実践桜会バザー
- ★ 11月11日 普連土学園バザー
- ★ 12月9日 清友会チャリティーコンサート会場



2008年度 ユニフェム東京総会のお知らせ

日時 : 2008年1月28日(月) 13:00~16:00

会場 : 津田塾大学同窓会会議室

(JR 千駄ヶ谷駅前・地下鉄都営大江戸線 国立競技場駅A4出口)

第1部 : 総会

第2部 : 記念講演「ラオスとカンボジアの支援プロジェクトを訪ねて」

講師 NPO法人ユニフェム日本国内委員会

副理事長/佐々木順子氏

☆第2部の講演会には、是非会員以外の方もお誘いの上、ご参加ください。
ユニフェム日本の支援先を視察したお話を通して、現地の様子や今後、
私たちがどのように関わられるかを伺える良い機会になると思います。

今後のスケジュール予告

2008年度 2大チャリティーコンサート

第12回チャリティーコンサート

5/10(Fri.) p.m.13:30

東京文化会館小ホール

第4回東京音楽コンクール最高位入賞
若き青年ピアニスト

斉藤一也

ピアノリサイタル



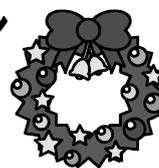
チケット発売= 2月1日予定

第13回チャリティーコンサート

12/20(Sat.) p.m.14:00

紀尾井ホール

クリスマス
コンサート!!



会計からのお願い

※郵便振り替え手数料が変わりました。

“ゆうちょ銀行”でご送金頂くとき、

窓口では 80円

ATMでは 120円

※ユニフェム東京経費節減に、ご協力下さい。

※郵便振替: 00190-6-550880

※口座名: 「ユニフェム東京」



★ご入会頂き有難うございました。

2007年7月~10月末日(敬称略)

新規会員: 池貝 孝子 山田 信子

★ご寄付をいただき有難うございました。

2007年7月~10月末日(敬称略)

寄付者: 大橋 数子 山口 久栄

北野 信子 池貝 孝子

山田 信子

ユニフェム東京NEWS 第23号

発行人: ユニフェム東京会長 五十嵐康子

発行日: 2007年12月10日

ユニフェム東京事務局

〒169-0074 東京都新宿区北新宿3-6-5-205

TEL/FAX: 03-3371-5201 金曜11時~15時

郵便振替: 00190-6-5508800

<http://www.unifemtokyo.org>

【編集後記】

※「国連人事で途上国の女性を起用する」との公約通り今年1月、
国連副事務総長にタンザニア・ダルエスサラーム大学出身の法律
学者アシャローズ・ミギロ氏が任命されたが、国連改革の中で、
途上国の女性の地位向上やユニフェムの活動にどのように向き合
ってくれるのかが、まだ見えてこないことが気がかり。(S)